

実習報告（基盤教育実習）

根拠を追求する姿勢を育成するための授業方法の分析

江里口 舞（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

現行の学習指導要領において数学科では、「活用する力」に重点を置く必要があるとされている。しかし、国や県で実施されている学習状況調査等の調査結果から生徒の活用力の低さが明確となっており、課題とされている現状がある。これらの原因の一つとして、理解を伴った習得が十分になされていないことが挙げられている。

ここで、知識・技能を習得する際に、教授されたままを受け取るのではなく、自分にとって理解・活用しやすい形へと学びほぐして保持することが理解を伴った習得であると考え。理解を伴った習得を実現するためには、生徒が学習内容の本質的な部分に疑問を抱き、それらと向き合ってみようとするような、「根拠を追求する姿勢」を持って学習活動に臨む必要があると考える。そうした活動を積み重ねることにより、新たに出会う事象等に対して、自ら根拠を追求しようとするようになることが期待できるのではないだろうか。学習指導要領においても、数学的活動の指導における配慮事項として「自ら課題を見だし、解決するための構想を立て、実践し、その結果を評価・改善する機会を設けること」が挙げられており、このことから根拠を追求する姿勢を育成することの必要性がうかがえる。

そこで、数学の授業を通して、様々な場面で根拠を追求する姿勢を育成できないかと考える。授業における教師の働き掛けや生徒の活動状況、授業全体の流れや形態などを踏まえて、どのような授業が効果的であるのかを明らかにしたい。上述した目標を達成するために、大学二年間を通して行う研究のテーマとして『根拠を追求する姿勢を育成するための数学科授業方法の研究』を設定した。

また、二年間を通じた研究テーマを受けて、一年目の基盤教育実習においては『根拠を追求する姿勢を育成するための授業方法の分析』というテーマを設定した。現在行われている授業の現状を把握、分析し、授業方法研究のリソースとなり得る要素を収集することを目的とする。

【探究実習の研究目標】

基盤教育実習の目標としては以下の三点を主な軸として設定した。

一つ目に「根拠を追求するために必要な具体的な活動のあり方を探る」ことである。根拠を追求するような活動を積み重ねることで、根拠を追求しようとする姿勢が身に付いてくるのではないかと考える。授業研究を行うための準備段階として、生徒・教師の両方の活動について、どのような活動が有効であるのか、それらを行う状況や用いる教材等も踏まえて考察する。

二つ目に実習校において「根拠を追求するような活動が授業の中でなされているのか、また教師がそれらを必要であると感じているのかを把握する」ことである。実践されている授業の参観や授業者との会話を通して、現状の把握、研究テーマの妥当性の有無を確認する。

最後に「根拠を追求する姿勢を育成するための授業作りについて検討する」ことである。実態把握における考察や理論研究をいかして実践できる形で構想を行い、研究の視点から検討する。ここから二年間を貫く研究のためのリソースを得る。

【探究実習の概要】

約半年間、週に一度実習校へ赴き実習を行った。一年生から三年生までの六クラスの数学の授業に参加し、その他の時間においてはメンター教員が担任を務める二年生のクラスへと入って実習を行った。実習校における数学の授業は、一年生ではT1授業、二年生では少人数授業、三年生ではT2授業の形態がとられており、多様な形態における授業を体験することができた。実習では主に、実習校の数学科教員の授業へ T2 として入りながら、担当学級における学級活動や授業外の時間へ参加し、生徒達と共に学校での一日を過ごす中で実態把握を進めていった。実態把握や授業参加を通して、現在行われている教育活動の特徴や生徒達の状態、授業内における様々な取り組みについて研究テーマの視点から分析・考察を行った。

また、一ヶ月に一度を基準として実習校側のメンター教員と大学院の担当教員と共にリフレクションを行う機会が設けられ、実習の振り返りやその後の計画等についての話し合いを通して、実習や研究の方向性の確認を行った。同様に、基盤教育実習に取り組んでいる実習生同士での意見交流を行い、実習を振り返る中で実践の検証を行う機会としてカンファレンスが設けられた。実習における不明点や悩みを解決し、進捗状況の報告や共有すべき項目の確認等を行うことができた。

【探究実習の成果と課題】

実習における実態把握を通して、実習校の生徒の様子や行われている授業、学校の教育方針等についての理解を深めることができた。授業内における活動の内容と形態、問題提示の方法とタイミング、問題そのものの難易度と自由度、教師の関わり方や生徒同士の関わり方といった項目について、それぞれの有効性や意義について考えることができたことや、それをもとに自身の研究についての見解を深めることができたことは成果であるといえる。考察した内容に関しては自身の考えで終始することなく、メンター教員や大学院の担当教員、他学生と意見交流を行うことで、新たな見方・考え方にふれ、自身の考察を振り返り、さらに深めていくことができた。

また、参観だけでなく T2 として授業に参加できたことにより、生徒の苦手とするポイントやつまづき、疑問を持つ場面にも多く出会うことができた。教えるのではなく、気づかせるような手立てを考えたり、生徒の理解の段階に応じて対応を変化させたりするなど試行錯誤する中で、教科の内容そのものの性質の理解を深め、研究テーマについての解釈を広げることができたように感じる。実践を経ての学びは伝聞よりも自身にとっての力となることを感じるとともに、教師の仕事についての理解の深まりを感じている。

実習を通しての課題の一つとして、実践を支える理論研究を十分に行えなかったことが挙げられる。そのため、特定の理論を通して授業観察等を行うことができなかった。それは今後研究を行う上での課題となるが、特定の理論に偏ることなく、他者の提唱する理論の狭い枠の中からのみではなく、広い視点で授業や生徒の姿、教師の関わり等を見ることができたことは、確実に今後の研究や実践、適した理論を探していくことにつながっていくと考えている。今後は実践に向けて具体的な単元にしばって探していくことで、完全に合致するものはないにしても、自身の研究に通ずるところを持ち、研究の後ろ盾となるような理論を見つけ出していきたい。

また、それぞれの授業について個々に分析や考察は行ってきたものの、一つの授業をじっくりと分析・考察することはできていない。それにより、考察の内容が断片的なものとなってしまったことも課題といえる。これまで記録してきた気づきや考察を整理することで、授業づくりに取り入れる視点が明確になり、今回到達できなかった実践レベルでの検討へと踏み込めるのではないかと考える。